Global Explorers to Cross Borders G.ecbo
広島大学大学院国際協力研究科　組織的な大学院教育改革推進プログラム

Newsletter

第6号　Vol.2 No.3

グローバルインターンシップ推進拠点の形成（G.ecboプログラム）
—10年後の自分を探そう 世界と出会うインターンシップ—

発行：2010年3月

目次:

新規開講科目	1
総括報告会	2-3
2009年度夏期派遣学生帰国レポート	4-5
OB/OG報告	6-7
活動予定	8

「能力開発特論」が課題発見セミナーと統合され 英語版「能力開発特論」になりました

マツダ財団のご協力で行われてきた日本語によるディベート演習が今年度で成功裏に終了したことを受け、同じく今年度に試行された課題発見セミナーと統合され、英語版の能力開発特論として衣替えすることになりました。

シラバスより

急速に変化する国際社会の中で活躍する専門職業人となるためには、専門分野の個々の知（知識や技術）に加え、それらを融合した新しい知や周辺分野の知などを俯瞰し活用するための広範な視野と柔軟な思考力が必要である。例えば、技術者として修得した技術を真に適用し社会に貢献するには、リスクに対する配慮などが重要である。このような広い視野と柔軟な思考能力、倫理、そして国際的視点の基盤となるものとしてデザイン能力、つまり高等教育レベルでの問題解決能力（課題編集能力、問題処理能力並びにコミュニケーション能力）が要求されている。各専門分野や周辺分野で学んだ知と個人の体験を関係付けながら現場での事象を解釈し表現していく過程を経験するために、ディベート及びケース・ライティングの演習を行う。こうした実践を通して、上記能力を養成することを第一の目的とする。また、本講義は「海外インターンシップG.ecbo特別教育プログラム」の事前研修活動の一つとしても位置づけられている。

G.ecboプログラムプロモーションDVD制作中

現在、G.ecboプログラムのプロモーションDVDを制作中です。プログラムの内容をわかりやすく伝え、また魅力を存分に理解してもらえる構成になっています。
2月4日にプログラム委員長の挨拶、および先輩学生のインタビュー撮影を行いました。
来年度以降の本プログラム広報に広く活用する予定です。

G.ecboプログラムとは？

インターンシップを中心に事前研修・事後研究を通して、
既存の学問領域に縛られない多様な分野の課題に適応できる研究者の輩出、国際協力・国際援助の第一線をリードする実務者の養成と、世界中から集まる留学生や研修生の高度専門職業人としての育成を目指します。

総括報告会

2010年2月16日（火）9時45分より、広島大学学士会館2階レセプションホールにて、総括報告会を開催いたしました。参加者は、招聘者9人学外者2人学内者65人の合計76人です。活動の3年目に当たる今年度は総括報告会として2部構成とし、第1部ではプログラム参加学生および委員会より活動成果報告を行い、これまで実施してきたプログラム成果の検証・評価を行いました。また、第2部では、受入機関のインターン受入責任者の方々、プログラム修了生をパネリストしてお招きし、現役学生、担当教員を交え、「**プログラムの成果と今後**」をテーマに議論しました。

第一部
グローバルインターンシップ活動報告

学生報告

ティーチングアシスタントの力石真（大学院国際協力研究科博士課程後期学生）の司会のもと、各分野代表の学生がそれぞれのインターンシップの成果を発表しました。発表者は下記の通りです。発表は質疑応答も含めて、全て英語で行われました。派遣前は自信のない学生が多かったのですが、プログラムを修了し、研究だけでなくコミュニケーション力や様々な経験から自信をつけた学生は、広い会場を埋めた聴衆の前でも臆することなく発表することができました。それぞれのインターンシップ活動が有意義であったことを思わせました。

海外インターンシップ
●飯山 慶（大学院国際協力研究科博士課程前期学生）フィリピンICLEI派遣
●古家野 孝行（大学院先端物質科学研究科博士課程前期学生）英国CRUK派遣
●小池　輝幸（大学院工学研究科博士課程前期学生）中国西川ゴム派遣
国内インターンシップ
●Hyo-Jin Lee（大学院国際協力研究科博士課程後期学生）独立行政法人北海道農業研究センター派遣
遡上教育インターンシップ
●澁谷 渚（大学院国際協力研究科博士課程後期学生）ザンビア大学派遣

グラミン銀行Golam Morshed Mohammad 氏からも質問がありました。

高校教員として働いた経験を持つ澁谷さんは、教室での子供たちの様子や研究内容を、動画などを交えてわかりやすく説明してくれました。

古家野さんは、帰国後も英語トレーニングを続け、英語力がぐんと伸びました。また、今回のインターンシップをきっかけに、博士後期課程への進学も考え始めました。

発表が終わった小池さんは、外で待ち構えていた濱田教授と鈴木助教から「良かったぞ。」の声。お二人は指導教員ではありませんが、師弟愛を感じた瞬間でした。

派遣先のMahallah Adalia氏が来賓として来ていましたが、飯山さんは堂々たるプレゼンを行い、質問に対する回答も積極的でした。

Leeさんは、来年度からのプログラムについて、奨学金のような制度があってもいいのではないかという提言をしました。

委員会報告

委員会からは、藤原章正委員長からプログラムの概略についての説明がありました。また高橋与志准教授から課題発見セミナーについて、ティーチングアシスタントのPhetkeo Poumanyvong（大学院国際協力研究科博士課程後期学生）から英語プレゼンテーション研修について、また平田大教授からは先端物質科学研究科におけるインターンシップについて、それぞれ報告がありました。アンケート評価報告では、中村聡研究員より派遣先、教員、学生から協力いただいたアンケート結果についての報告がありました。プログラムは4年目になり、確実に浸透していってはいますが、参加のきっかけは指導教官や先輩などからの勧めが多いようです。学生がプログラムに期待することとしては、インターンシップ後のフォローアップ強化、また直結しない必修科目の軽減があげられています。継続して受け入れていただいている派遣先からは、研修内容の継続性についても改善が求められています。以上より、事務局と教員の連携促進、研修内容を研修現場へつなげる仕組みの構築、事後研究活動の充実などが、今後の課題として挙げられました。

第二部
パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、主にプログラムの継続性について、ディスカッションが行われました。G.ecboプログラムは、平成17年度から18年度に文部科学省「魅力ある大学院教育イニシアティブ事業」として採択された「国際協力学を拓く実践的研究者育成の試み」を前身に、平成19年度からは「組織的な大学院教育改革推進プログラム」採択事業としてプログラムを進めてきましたが、その支援も今年度で最後となりました。

今後、いかに運営していくかについて、ICLEIのMahallah氏からは、インターンシップのテーマをリレー方式に次の学生へとバトンタッチする仕組みを作っていくと、企業にとても大学および学生にとってもアウトプットが大きいのではないかと提案してくださいました。また前JICAマカッサル事務所の徳丸氏からは、日本の国際協力においても市民参加が重要になっており、途上国だけでなく日本人にも恩恵を被ることができるので、研究だけでなく体験としてのインターンシップも推進していくべきであると述べられました。

OBの馬場氏からは、インターンシップ経験を通して精神面と技術面を高めようとするきっかけをもらい、それが今の仕事にも生かされていると話してくださいました。OGのJeon氏からも、現地に行き今でも現地に対して強い親近感を抱いており、良い形の出会いで、それが現在の仕事にも生かされていると、話してくださいました。現役学生の長尾さんからは、夢の国連機関でのインターンを後押しをしてもらったことがとても大きかったと、プログラムの良さを語ってくれました。

「ECBOは鏡だ」と述べた鈴木助教は、藤原教授の教員の意識改革意識転換が重要だという話を受けて、大学も様々なプログラムがあるけれども今はそれがパンクしそうになっているので、難しいことだけれどももっと整理して走らせると上手くいくのではないかと、提案しました。

講評では、西川ゴム工業株式会社の久保勇人氏、独立行政法人北海道農業研究センターの渡辺也恭氏、独立行政法人国際協力機構中国国際センターの永田邦昭所長、恵泉女学園大学の上村英明教授、グラミン銀行のGolam Morshed Mohammed 氏から、それぞれお言葉をいただきました。

モデレーター
肥後 靖　　広島大学大学院国際協力研究科教授
パネリスト
Mahallah Adalia 氏　国際NGO ICLEI(フィリピン)
徳丸 周志 氏　　前JICAマカッサル事務所(インドネシア)
鈴木 裕之　　広島大学大学院工学研究科助教
馬場 智史 氏　　(ECBO修了生) NTT西日本
HyeonJeong Jeon氏　(i-ECBO修了生)特定非営利活動法人ピースビルダーズ
長尾 浩介　　広島大学大学院国際協力研究科博士課程前期学生

懇親会

総括報告会終了後、学士会館1階のレストラン「ラ・ボエーム」にて懇親会が行われました。来賓の中にはお互い初対面の方々も多くいらっしゃいましたが、同じ国際協力の分野に立つ方々でしたので、世代も国境も超えて大いに盛り上がりました。

2009年度夏期派遣学生　帰国レポート

長尾　浩介　KOSUKE NAGAO

派遣先	UNDP （東チモール）
研修期間	2009年8月10日　～　2009年10月9日
研修内容	To research the effectiveness of the PCM in UNDP Timor -Leste, and the approach to Capacity Development.

Impression of Internship

The internship in UNDP Timor-Leste provided me with fabulous experiences which broadened out my view of career development and deepen my knowledge about UNDP work and system, and the situation in Timor-Leste. In addition to the internship activities which I mentioned above, what is so much appreciated was to have a lot of opportunities to meet many staffs engaged in the field of international cooperation and development such as the United Nations, JICA, NGOs, Japan embassy, professors, researcher, Asian Development Bank, and USAID. I met many people who stand at the field that I aim. Through their talk, my plan for the future has become more obvious and realistic.

Furthermore, the staffs at Pro-Poor Policy unit were extremely nice to me and showed their deep consideration toward me although they were quite busy. The numbers of staffs at the unit are 4 including me. The Pro-Poor Policy unit consists of Policy Specialist & Head of the unit (Timorese), Program Officer (Spanish), and Program Assistant (Timorese). I was really interested in their each perspective and learned from them a lot.

During the internship, I could always learn about the situation Timor-Leste from Dr. Gomes and my colleagues, and at the same time I could see the actual situation everyday on my way to the office. Children were looking for food from garbage and young people were selling SIM cards and Pursa (pre-paid card for cell phone) on the road from early morning to late night. I am afraid that they have heightened their frustration, and someday it will be exploded again as the political crisis in 2006.As an intern, I could objectively see some problems related to the UN system and relation owing to cultural, historical and mutual understandings at the work place. It was quite hard for me to adjust myself to a large variety of English and cultures in the international environment which was the most unique in that I had ever experienced. In any case, it was great pleasure for me to talk with many professionals.

Two months was really short for me. Having passed two months, I think that the staffs including other units finally recognized my face by name. As a first step, an intern need to be known by the staffs around, otherwise an intern might be just a stranger, and cannot ask any requests. It was quite short term but G.ecbo program gave me such a sense of mission which push me and became a crucial factor to make my internship valuable.

I regret that I could not contribute to the unit due to lack of my ability although for me the experiences are irreplaceable and I enjoyed so much. I think the internship can be a wide variety of ways depending on the person, how much ability he/she has, not only work ability, also communication skill. In my case, staffs often let me make arbitrary decisions. I did not have special assignment. At the beginning of the internship, it was trouble for me. Ayako-san, the program officer of the Crisis Prevention & Recovery unit, advised me. I was deeply convinced and took her advice, which was “Do your best for any small job”. This was certainly what she has been doing as an UN staff. Her advice encouraged me and gave me a hint how to utilize the opportunity for my experience.

Lastly, I would like to express my deepest gratitude to you all in Japan and Timor-Leste for amazing supports and this opportunity, I will make ceaseless efforts.

Advice to next internship student

Blackout frequently happens at night (7pm to 10pm).

I basically stayed in Dili for two months, and did not go to many other districts. I heard Dili is not Timor-Leste because it is relatively developed compared with other districts. I think if you have chances to go to the local places, you should go as many as you can.

If you have time, please study the language.

This opportunity is great! So I recommend next interns to have the opportunity to talk to many people.

2009年度夏期派遣学生　帰国レポート

松山　匡延　　MASANOBU MATSUYAMA

派遣先	JICAマラウィ
研修期間	2009年10月9日　～　2009年12月2日
研修内容	JICAが委託しているSMASSE（中等理数科教育強化計画）プロジェクトに参加

Impression of Internship

この実習を通して、まずJICAの行っている国際協力、特に教育協力に対する理解を深めることができました。日下部専門家との昼下がりの対談時に教えて頂いた内容が、頭では理解していても、現場に立ちながら実感して学ぶ過程で、その深部に至る理解のきっかけとなったと考えています。その内容は、よく言われるような欧米型援助と日本型援助の比較の話でした。そのようなことは、確かに大学院の講義や専門書、SMASSE報告書を読んで分かっていながらも、それが実践の中でどのように現場に生きており、どのように実現し、そのように呼ばれるようになっているのかは、この実習を通して理解できました。それはSMASSEプロジェクトの中にも象徴されています。例えばSMASSEでは、相手国のCapacity Development（CD）を念頭に、日本人専門家が黒子に徹し、主にサポーターとして活動する部分に表れています。Project Design Matrix（PDM）の作成やステークホルダー会議などでも、非常に活発な議論が繰り広げられたことも教えて頂きました。実際に今回の実習の中でも、一つ一つの決定が多くの議論の末に成り立つものであることが分かりました。その議論の結果は、ステークホルダーとの合意を得て実践に移されます。合意が形成されていない段階で実施しても、その効果が期待できないことが予想されるからであり、全員の合意の下で実施に移す重要性はそこにあります。一つの議論を取っても、プロジェクトの理想通りの合意が得られることは難しいです。そこにはステークホルダーたちが持つ意見や、抱えている様々な問題が介在しているからです。真剣で深い議論を通して妥協点を探り、少しずつではあるが、合意へと至るのでしょう。

しかしながら、プロジェクトにはPDMが存在し、予定している活動をこなしていきながら、その成果を出していかなくてはいけないという側面があります。CDを念頭に「相手が気付き動き出すこと待つ」ことと、成果のための「予定通りの活動」との天秤は、そのバランス取りが非常に難しいものであることも認識しました。

SMASSEは特徴的なプロジェクトなのかもしれませんが、私が実習の目的に示したように、最初のイメージは私自身の青年海外協力隊で得た現場での知見の下に、この実習で更に上の段階での知見と、現場との繋がりというものを学ぶことでしたが、SMASSEはその全てを包含しており、国際協力とプロジェクトについて広範囲な知見を学ぶことができました。

Advice to next internship student

インターンの参加姿勢は、お客様的な、勉強に来ています的な姿勢を取ることも可能ですが、私の場合は、分からないことがあっても、出来ないことがあっても、積極的にプロジェクトの一員として関わっていく姿勢を持つことで、その関わり具合と遣り甲斐、そこから学ぶものが飛躍的に広がりました。前半ではプロジェクト全体や進捗について学ばせてもらえる時間はありますが、その後はOJT（On-the-Job Training）形式となるため、前半のような姿勢で臨むのは相応しくありません。自分がどのような自覚を持つかで、学べる範囲は大きく変わります。

私は指導担当者に「厳しく教えてもらいたい」と言ったため、細かな点までチェックされると同時に、多くの業務を割り振ってもらえるようになり、実践域の幅が広がることで、学びの幅も広がりました。現場型のプロジェクトであるため、研修も当然現場密着型でしたが、そこから日本型援助の特色ともいえるCD本質的な部分を体験し、学ぶことができました。

全てを通して、SMASSEプロジェクトにおける現場体験は、今後の自身の方向性を同定する意味でも、非常に有益でした。

OB/OG報告

難波一宏（広島大学大学院国際協力研究科2009年9月卒業）

所属：（財）国際開発救援財団

2009年9月に修士課程を修了した後、現在私は（財）国際開発救援財団の海外事業チームに所属しています。1990年に設立された国際協力を行う民間の財団で、地域開発協力と緊急援助を二本柱とした草の根協力を中心とした活動を行う団体です。東南アジア諸国を中心に活動を行っており、現地事務所は、カンボジアのプノンペンとベトナムのダナンの二か所にあります。

昨年の10月からすでに3カ月がたちましたが、その間に研修員の受入れ、海外事業のDocumentation、予算編成にかかわる業務の補佐を行ってきました。ゆくゆくは海外事務所に勤務することとなるのですが、現地での役割の一つとして、東京事務所と現地での調整業務も重要となりますので、東京にいる間に国内業務に関して学んでいるというのが、現在の行っている業務です。

i-ECBOではフィリピンにあるNGOのICLEIにお世話になり、水資源管理にかかわる現地調査を行いましたが、現在東京事務所にいる職員のうち3名は以前フィリピンでの活動を経験した人たちで、フィリピンの話題で盛り上がることがよくあります。インターンで行った調査が今後の仕事にどう関わるのかは何とも言えませんが、フィリピンでの生活で得たものは貴重でしたし、そして何より活動を通してお世話になった多くの人たちに対する感謝の気持ちは忘れることはありません。

まだ働いて3か月という短い期間しか経っていませんが、この3カ月を振り返ってみて思うことは、国際協力はやりがいがあるし楽しくもあるのですが、答えがなかなか見つかりそうもない（というよりも無いかも？？）所に来たのだなあ、というのが正直な気持ちです。そういうときにインターンでお世話になったみなさんのことを思い出すと、肩の力が抜けて、難しく考えることなんかないことを再認識させてくれます。初心を忘れかけている今日この頃ですが、謙虚な気持ちを忘れずにやっていきたいと思います。

今年度インターンシップ関連の修士論文

本プログラム参加者のうち以下の2名が、インターンシップの成果をもとに修士論文をまとめました。

2010.3卒業	山下早紀子	カンキツグリーニング病に関する栄養生理学的研究
2010.3卒業	森永茜	An analysis of factors contributing to solar home system users' satisfaction: A case study of rural Bangladesh

活動報告　2009年度12月-3月

12月2日	G.ecboワーキンググループ幹事会
12月7日	事前英語プレゼン研修開始
12月22日	リスク管理セミナー開催
1月15日	2009年度夏期派遣学生帰国報告会
1月22日25日	事前英語プレゼン研修最終発表会
1月25日	壮行会開催
2月4日～	2009年度冬期インターン学生派遣
2月16日	G.ecboプログラム総括報告会
3月1日～	インターン派遣先教員訪問（現地中間/最終発表会）

壮行会の様子

片岡　義久（広島大学大学院国際協力研究科2010年3月卒業予定）
気象庁就職予定

私は、2009年2月中旬から1ヶ月間、インドネシア共和国マカッサルにおいてJICA事務所（MFO: Makassar Field Office）のインターンシップに参加した。MFOは常に慌しく、現地で活躍する特定分野の専門家や青年海外協力隊の方々が事務所を出入りし、各々のプロジェクトに関する会議を行い、それらのプロジェクトの進捗状況を取りまとめる仕事を毎日のように行っている。私は、その中でスラウェシ地域能力開発向上プロジェクトの活動について学んだ。このプロジェクトの目的は、簡単に言えば現地の住民が自分達の技術や能力だけで持続可能な地域開発を行うために必要な能力を養うことである。そのプロジェクトが実行され機能するために、MFOの方々や専門家が現地住民、現地の幹部といったキーパーソンと話し合い、時には会議、講演、パイロット事業などを開いて奔走している実情を見学し、一部ではあるがこれに協力することが出来た。私はもともと気象観測に興味があったので、事務所の方のご配慮で、プロジェクトの合間に現地の気象台に行くことができた。そこで、「気象観測システムを先進国から導入したがうまく機能しなくなり、その解決方法がわからなくて困っている」という話を現地スタッフから聞くことができた。まさに、それは私が体験したかったインターンシッププロジェクトの目的そのものであった。気象現象を取り扱うにはデータの質が重要であり、気象には国境がないので、世界全体での質が揃っていない使い物にならない。このインターンシップによって、気象分野において国際協力が重要な部分を占めていることに気がつき、修士課程修了後は気象関係の仕事に就き、このような問題を解決する機会を得たいと思うようになった。

インターンシップから帰国した3月末から就職活動を始めたが、実を言うと気象庁を受けるにおいて自分の学力が遥かに足りないのではないか、また気象庁で働く方々の多くは理学部出身（私は工学部出身）であると聞いて、初めから駄目なのではないかと、かなり弱気になっていた。ところが、その後の国家公務員採用試験（Ⅰ種理工Ⅲ、Ⅱ種物理）は合格することができたので、必然的に気象庁での採用を目指すことになった。官庁訪問では、インターンシップで体験したことを気象庁の志望動機に含めて話したところ、国際協力という視点で気象分野の発展を考える学生は少ないようで、面接官の方が興味をもって聞いてくださった。Ⅰ種の採用試験では最終面接で落ちたものの、Ⅱ種での採用に至ることが出来た。研修期間は1ヶ月と短かったものの、国際協力の必要性を明確に感じることができ、将来の気象分野の発展を考えるうえにおいて自分のモチベーションを向上させる本当に良いきっかけになったと感じている。

村山　直輝（広島大学大学院国際協力研究科2010年3月卒業予定）
株式会社オリエンタルコンサルタンツ就職予定

「就職氷河期の再来」。売り手市場から一転し、ある学部では「50社受けろ」と言われる状況下で私の就活は始りました。厳しい状況で、第1希望のコンサルタントや総合商社、大手銀行など納得した就活が出来たのは、出来ない自分を認める一方、「やりたいこと」や「自分を高めたい，挑戦したい」という強い思いが持てたからだと思います。その転機が海外インターンでした。私はVietnamの(株)ALMECで5週間お世話になりました。短い期間ですが、「途上国の現実」と「誇りを持って働く社員の方々」を目の当たりにし、新しい自分を確立することが出来ました。

それまで、途上国の現実について、講義や研究室で何度も話を聞いていましたが、どこか現実味がありませんでした。しかし、百聞は一見に如かず。GDPの話から原付5人乗り、蛇口からの茶色の水、食糧、玄関の鉄格子入りの二重扉など全く違う世界がそこにありました。そのような中で誇りを持って働く社員の方々から、数え切れないほどの刺激を頂きました。家族や恋人を置いてでも、途上国で働くことを選ばれている人達は、特殊かもしれません。しかし、自分の仕事が与える社会影響や、そのやりがいを感じて進んで働く姿が印象的で、自分も彼らのように情熱を持ち、社会と関わり合いながら進み続けていきたい、と考えるようになりました。

その結果、帰国後は修論以外にも各種NPO協会の活動に参加するようになりました。進路の決定に悩み、他のインターン参加など、積極的に進んで行動し、自分から何かを変えていくという大きな財産を得ることができました。これが、就活の成功に結び付いたと思います。

最後に、就職試験は面接です。海外インターンの経験の結果、自分の経験や考えを胸を張って話すことが出来ました。周囲の素晴らしい環境も活用させて頂き、担当教員の方に面接練習をして頂くなど、自分から進む姿勢が功を奏したと思います。その面接は他のどんな練習よりも役立ちました（緊張しました、怖かったです）。勿論、日々の活動が基盤なので、1日1日がとても大事だと思いますが…。

2010年度TAのご紹介

フォローアップ教育の一環として、過去にプログラムに参加した学生を、ティーチングアシスタントとして雇用しています。

Phetkeo Poumanyvong（博士課程後期3年）
2008年度派遣　タイ　UNESCAP
英語プレゼンテーション担当

高松森一郎(博士課程後期2年)
2007年度派遣　フィリピン　UPNISMED
英語プレゼンテーション担当

長尾浩介(博士課程前期2年)
2009年度派遣　東チモール　UNDP
能力開発特論担当

隅田姿(博士課程前期1年)
2009年度派遣　東チモール　UNICEF
英語プレゼンテーション担当

G.ecboプログラムは、今年度で支援は終了しますが、22年度からも継続します。

課題発見セミナーで行われますアフリカルチャーゲームのDVDができました！
興味のある方は
事務局まで。

G.ecboDay開催

4/6(火)14:00-

国際協力研究科
大会議室にて

活動予定 2010年度4月-7月

G.ecbo Day（4月）

夏期インターンシップ募集/選考（4月）

冬期インターンシップ帰国報告会（4月）

英語プレゼン研修（5月～）

アフリカルチャーゲーム（5月22日）

リスク管理セミナー（6月）

事務局編集後記

一年もようやく終わろうとしています。産休を経て再スタートした私ですが、何度もくじけそうになりつつも、内容が濃くボリュームたっぷりのプログラムをコツコツとこなす学生たちに負けじと、どうにか踏ん張ることができました。ありがとうございます。徐々に参加人数が増えているG.ecboプログラムですが、どんな逆風が吹こうとも前に進んでいける人材育成に、事務局ながらも寄与していけるよう頑張りたいと思います。(G.ecbo事務局K)

次号予告

＊2009年度冬期派遣学生の報告
＊ECBO修了生からの声
＊派遣先企業からの声　他

Global Explorers to Cross Borders G.ecbo

広島大学大学院国際協力研究科G.ecbo事務局
〒739-8529
広島県東広島市鏡山1-5-1
電話 082(424)6950
Email: iecbo@hiroshima-u.ac.jp

ホームページもご覧下さい。
http://www.hiroshima-u.ac.jp/gecbo/index.html